

# 『本朝水滸伝』論

——理論と実践——

渡\* 邊 さやか

はじめに

『本朝水滸伝』は『水滸伝』の強い影響下に成った小説<sup>①</sup>であると言指摘されるように、日本の上代を舞台にした物語でありながら漢籍の影響も見過<sup>②</sup>すことができず。また、馬琴が『本朝水滸伝』を讀む并に批評(天保四成立)で難じたように、そのエピソードはしばしば上代文化を逸脱し近世文化の反映に彩られている。ところが本作はそうした内容とは必ずしもそぐわない上代語彙を多用した擬古的な和文で綴られている。内容と表現との間に生じた不一致は馬琴以来常に本作の欠点と見なされ、奔放な史実の改変と併せて批判の対象とされてきた。

しかし、ここで一つの疑問が生じる。作者建部綾足が表現と内容の不一致という欠点を押してまで和文で本作を綴ることにこだわった背景には何があったのであろうか。またこの不一致は本当に欠点としか見なし得ない特徴なのだろうか。本稿はこれらの点を明らかにすることを最大の目標とする。本稿前半ではまず第四十条以降の秦金明<sup>はななみ</sup>と太宰府の阿曾丸<sup>あそまろ</sup>のエピソードを中心に『本朝水滸伝』における漢籍からの影響、近世文化の反映の様相を確認していく。後半では綾足周辺で編まれた俳書の記述を手がかりに和文表現に関する綾足の理論と『本朝水滸伝』におけるその実践の様相を確かめていく。

## 1 金明の餓死<sup>かなみ</sup>

『本朝水滸伝』における漢籍からの影響を具体的に示す例として秦金明のエピソードを取り上げる。秦金明は本編第四十一条、及び第四十五条に登場する。この人物は太宰府の長官・阿曾丸の家臣であり、道鏡の権威を借りて悪政を行う阿曾丸とは対照的に常に主君と民衆を第一に考える忠臣として描かれる。第四十一条で妻から阿曾丸の専横を知らされた金明は様々に阿曾丸を諫めるが一向に聞き入れられない。そればかりか、「君のためには、(妻子ですら)塵あくたのごとくおもひかへてつかふまつるは、

是臣の道也」と諫めたために却って阿曾丸の手で妻子を斬殺されてしまう<sup>③</sup>。第四十五条で金明は香椎宮に籠り阿曾丸の改心を祈って断食を始める。見かねた姑は「家にかへり、時をまちて、君をいさめ、身をたも」つことを勧めるが聞き入れない。金明は「改心した阿曾丸が迎えを寄越すことを信じて七日間祈り続けたが迎えが来なかつたため、それが香椎の神意であると受け入れて死を選ぶ」と言う。金明は姑にも共に祈ることを勧め、祈り続けた二人は相次いで餓死を遂げる。

諫言をして餓死という金明の最期は『史記』列伝冒頭に登場する伯夷叔斉のエピソードを彷彿とさせる。武王が紂王を倒そうと挙兵した時、伯夷叔斉は武王の馬を押さえ「臣でありながら君を殺すのは、仁と言えらるうか」と言って諫めた。王の側近は二人を殺そうとしたが、太公望が「この者は義人である」と助言をして、その場から去らせた。その後、武王は殷との戦いを平定し終えて周を建国した。以下の引用は『史記』伯夷列伝のこれに続く箇所である<sup>④</sup>。

而るに伯夷・叔斉之を恥ぢ、義もて周の粟を食はず。首陽山に隠れ、薇を守りて之を食ふ。餓えて且に死なんとするに及び歌を作る。其の辭に曰く、彼の西山に登り、其の薇を守る。暴を以て暴に易へ、其の非を知らず。神農・虞・夏、忽焉として没はる。我安くにか適帰せん。干嗟、徂かん、命之れ衰へたり、と。遂に首陽山に餓死す。此に由りて之を觀れば、怨みたるか、非ざるか。

伯夷叔斉は武王への諫言が容れられなかったことから、周へ仕官することを拒み首陽山に籠もって餓死した。主君の改心を祈るために断食し餓死した金明とは行動の動機に違いが見られるが、共に諫言が容れられなかった結果、山や森に籠もって餓死したという点は一致している。さらに金明は阿曾丸への恨みを述べる姑に対し「おのれか

〔キーワード〕本朝水滸伝／建部綾足／賀茂真淵／国学／十八世紀の日本

\*平成一八年度生 国際日本学専攻

くいりて死なんとするは、妻子を殺され参らせし恨を聞え奉るにあらず。さればこそ、其後も（中略）役の事もよくつとめて、尚其志をうしなはず、折／＼諫め参らせけるなり。是の恨をとめざる心也」（第四十五条）と阿曾丸への怨恨がないことを主張する。この発言は右に挙げた伯夷列伝の「此に由りて之を觀れば、怨みたるか、非ざるか」の表現を踏まえたものではないだろうか。金明が伯夷叔斉と同じ餓死の最期を遂げようとしてつとめ目的は怨恨の表明ではないと主張することさらにこの人物の高潔な印象が強調される。

もう一つ注目したい点に金明や阿曾丸がしばしば発言の中で漢籍に言及していることがある。第四十一条は諫言する金明とそれを退ける阿曾丸のやりとりによく多くの文章が費やされるが、その中には『漁父の辞』、『古文孝経訓伝序』、『史記』殷本紀の文王比干のエピソードなど多くの漢籍への言及が見られる。そして屈原や比干といった漢籍中の賢人の姿は双方の発言において積極的に金明と重ね合わされ、やはりこの人物の高潔性を表すのに役立つている。

このように『本朝水滸伝』第四十一条、第四十五条では『史記』を始めとする漢籍の利用が人物造形や話の展開に大きな役割を果たす。このことは本作が全体として『水滸伝』の翻案であると同時に部分的にも細かな漢籍の翻案を取り入れて成立していたことを示すといえるだろう。

## 2 阿曾丸と「わざおぎや」

次に金明と対立する阿曾丸の行動に注目したい。阿曾丸が存在感を増す第三十九条以降の主な行動を簡条書きで確認する。

- ・第三十九条：葦城の姫に懸想する。
- ・第四十条：葦城の姫と結婚、寵愛。

光源氏の六条院を模した邸宅を建てるため香椎の森の神木を切らせる。

この事業のために民の生業を妨げ、貢ぎ物をむさぼる。

箱崎の浜に遊郭を置き、旅人からも金銭を取る。

- ・第四十一条：家人秦金明の諫言を聞かず、金明の目の前で妻子を斬殺する。

- ・第四十三条：松浦川で夕涼みがてら鮎釣をする。

その際、座興として藤原清川に妻とのなれそめを語らせる。

- ・第四十七条：金明が餓死したと聞いて「当然の報い」と罵る。

清川が妹と偽って連れていた楊貴妃に懸想する。

- ・第四十八条：清川に「俳人」（太鼓持ち）として仕えるよう勧める。

- ・第四十九条：箱崎の浜に「わざおぎや」（芝居小屋）を作る。

清川を座元として遊女や楊貴妃による芝居を興行させる。

- ・第五十条：芝居の最中、楊貴妃に乱暴を働こうとする。

止めようとした清川の妻、珠名の妻を斬殺する。

まとめると阿曾丸には遊興に関わる行動が多いことに気付く（傍線部）。それと関連して葦城の姫、箱崎の遊女、楊貴妃らへの色欲に関わる行動も多い。阿曾丸は非常に享樂的な存在として描かれており、多くの場合、この人物の悪事ははつきりとした信念に基づいたものではなく行き過ぎた享樂主義の弊害として起る。そこには阿曾丸が常に自己の欲望を最優先する結果、金明を始めとする勇士達の理念——民衆への慈悲、主君への忠誠など——に照らして許しがたい行動が自然に次々にとられていく図式がある。

加えて金明の妻子、清川の妻、珠名の妻はいずれも阿曾丸の手で斬殺されており、彼が享樂的な性格と共に残忍性をもつ人物として書かれていることも見逃してはならないだろう。さらに、勇士達の行動原理が「仁」（民衆への慈悲）、「忠」（主君への忠誠）など近世における儒教倫理に則っているのに対し、阿曾丸の欲望の表れ方もまた「遊郭を置く」「舟遊びをする」「芝居小屋を置く」等あくまで近世的である点は注目される。八世紀日本を舞台にした物語であるにも関わらず、これらの登場人物の思考様式に上代人らしさはほとんど見られない。特に遊郭を開き、芝居を興行するという阿曾丸の行動には享樂主義にとどまらない近世的な商業主義も表れているようだ。

『本朝水滸伝』が書かれた十八世紀後期は都市の経済活動が大きく発展した時期だった。『本朝水滸伝』の前編が刊行された安永二年（一七七三）よりやや溯るが、この時期の都市生活の賑わい、都市文化の爛熟は、自堕落先生の『風俗文集 昔の反古』（延享元（一七四四）刊）に収載される「市中の弁」や、風来山人『根南志具佐』（宝暦十三（一七六三）刊）巻四の両国橋界隈の描写に表れていることがよく知られる。これらの文章には当時の江戸に暮らす都市生活者が豊かな衣食住・娯楽を享受する有様が詳しく描き出される。そしてそうした十八世紀の近世都市生活者の姿は阿曾丸の姿

と重なる部分が多い。試みに松浦川での阿曾丸の夕涼みと、『根南志具佐』巻四にある隅田川での瀬川菊之丞の夕涼みの描写を並べてみよう。

やがて阿曾丸は馬に打のり、供人あまためしつれて、とまり獵に出けるなへに、松浦の鮎子釣せんとて来たる。夕陽影のてり入るに、絹垣をほらせ、露などをば八重にしかせて打あがり、風は吹入べくしつらひたるに、川面にむかひをれり。猶もたせたるわりご・重箱などには、玉をかざりたるをひらかせ、酒壺を百ばかり打ならべて、「皆出て鮎つれ。釣得ば鱈にして出せ」など、興にのりて遊びけるに、日も入がたになりて、涼しき風のみ吹わたるに……

去程に菊之丞が仕出し舟、萩野八重桐・鎌倉平九郎・中村与三八などは、藝はもとより珍しからず、さわぎも又うるさし、いと静に酒酌かはし、人のさわぎを見て歩行(く)は、さりととは又能(き)慰なり。人々は興に乗じて、香包取(り)出して一炊くゆらせ、いとしづかにたのしみけるが、いざや中州の邊へ行(き)て蜆とらんと、皆々小舟に乗(り)移(る)。頃しも水無月の中の五日、日は西山にかたむき、月代東にさし出(で)て、水の面漣満立(ち)ていと涼しく、頃日の暑も忘る(る)ばかり、別世界に出(で)たる思ひをなしければ……

夕景の中、川風に涼みながらの酒宴は全く同じ趣向である。鮎と蜆の違いがあるが楽しみとしての漁を行う点も共通する。『本朝水滸伝』の読者は阿曾丸の夕涼みを見てそれを自然と近世の舟遊びのイメージに結びつけたことだろう。

他にも遊郭の設置、芝居の興行等、八世紀が舞台の物語であるにも関わらず阿曾丸の行動には十八世紀の同時代感覚の反映が著しい。「徹底した歴史からの逸脱ぶり」「奔放な物語世界」を指摘される『本朝水滸伝』の特徴はこうした箇所にもよく表れている。また馬琴も『本朝水滸伝』を読む際に批評」の中で第四十九条の芝居興行の趣向の書き様が「あまりに今めかしく」見えることを延々難じた上で「いかに思ひとりて書たるにや、こゝろ得がたし」と一喝する。さらに『本朝水滸伝』第十条についても以下のように述べている。「おもふに文を古雅に、事は今様にして、雅俗に媚んとほりせしならん。さはれ、事はいにしへの態りをしるすとも、文は雅俗に通用せざれば、広くおこなはれがたきもの也」。ここで馬琴は趣向の同時代性という特徴を認めつつも、そうした内容が擬古的な和文という表現と不一致を起していることへの違和感を表明し

ている。この表現と内容の不一致に対する批判は以後百七十余年ほとんど固定したまま『本朝水滸伝』評の基本形として受け継がれていると言つてよいだろう。

しかし、本作の内容が近世的に過ぎるという点に関しては、近世人である綾足の手になる本作にとつてアイデアの源泉が作品をとりまく同時代の現実にあつたことは当然の帰結であつたと思われる。まして本作は架空の人物が多く登場し超自然的な現象についても描かれる虚構性の強い作品であり、そもそも考証が不可能な部分も多い。そこで本作の史実からの乖離は自明の前提と位置づけた上で、それを批判するに止まらず、乖離から読み取れるものを積極的に探つていくほうが今日の読者の姿勢として有効ではないだろうか。また前項では金明のエピソードが漢籍に改変を加える形で創作されたという説を述べたが、ここで見られる近世の文物の上代への置き換えも共通する翻案の発想の元で使われた創作技法と見ることができよう。

### 3 和文と綾足——「詞のあや」をめぐつて

これまでに確かめた『本朝水滸伝』の特徴を踏まえ、改めて本作が擬古的な和文という表現で書かれた背景に向き合いたい。

綾足周辺で編まれた俳書中には、しばしば和文と漢文の特徴比較に関する文章が見られる。それらは片歌論の普及をめざして綴られた書であり片歌の創作に関わる内容に話題が限られているが、小説などの散文にも適用可能と思われる内容が多く含まれている。そこでこれらの内容を手がかりに『本朝水滸伝』の和文に対する綾足の態度を考察する方法は一定の有効性をもつと考えられる。

例えば『片歌二夜問答』(宝暦十三、江戸須原屋市兵衛刊)は「綾足の片歌説の理論書として公刊された最初の書」であり、門人素輪と綾足の問答形式で俳諧・片歌に対する綾足の自説が述べられた書であるが、その中には以下のような文章が見られる。

○輪問 我聞く。日の本は言魂の助くる国にて、唯詞のみをもて心をあらはす。文字の上のことにあらずと。大人近頃文字をあらため書たまふは如何。

○綾答 問のごとく言魂の国にして、今やうの片哥といへども、唯詞のみ也。文字の理をもては、曾て作らず。我近頃文字をあらためて、正字を出すは、是をもて言の葉を作るにはあらず。(中略)

さて日の本はことばの国とは、漢は字義をもてくさくさの意をあらはし、皇朝は詞

のあやをもて、深きこゝろを述ること、片歌とても、其ごとし。しかるに明題集に悉く文字をあらため書たるは、いま日の本に用ゐるなす、いづれか漢土の文字ならざる。しかれば認字書むより、是も正字を書たらん、是を詞の助とするにはあらねど、事は正しきによらざらんや。

文中で綾足は「漢は字義をもてくさくさの意をあらはし」「皇朝は詞のあやをもて、深きこゝろを述る」と漢和の文章を比較している。前者は中国語が伝達媒体として漢字を重視することについて述べているようだ。一方、日本語について述べた後者に現れる「詞のあや」とは何だろう。これと同じ、あるいは類似する言葉は他にも綾足の関わった俳書に散見される。

○句の詞にいまめかしく聞えたる、或はあななかびたるも、おの／＼古き書の掬あるをもていだす。蓋雅言をもてよみくだすに詞のあやをなすものあり、又平話に読なしてをかき所もはべれば、句によりては其たがひめあり。見む人はをわいだめな(15)にこそあらめ。

さはは彼につけて、吾友湯鞍等にすゝめ聞え、発語のめやすからむ物こそあらめといふに、こたび詞艸小苑の書なれり。(中略)さるは此書は夏虫の火虫の衣いとうすかれど、言霊のさきはふことのあやは、うまごりのあやしきまでかいこめたる物にこそあらめ。(16)

前者は『古今俳諧明題集』凡例の文章であり、傍線部前後では句によっては擬古的な訓読(雅言)で読んだほうが「詞のあや」をなすものがあると述べているようだ。(17)一方、後者は「詞艸小苑」の橘実磨による跋文である。傍線部前後では詞艸小苑のテーマである枕詞を織り交ぜながら、この書はごく薄いものだが「このあや」は不思議なまでに掻き集めたものであるという内容を述べている。

他に『歌文要語』(明和三刊、全集七卷)に「○阿夜爾加奈之○万 あやは紋の字意。綾などの紋の入組たる如く得もいひがたき也」とある箇所も手がかりとなる。傍線部によれば、ここで「あや」は「得もいひがたき」つまり言葉にするのが困難なものや状態を表現する語として使われている。これを踏まえた上で再び「詞のあや」が指すものを考えると、それは「言語の内包する(本来、言語化困難な)微妙で複雑な意味」「言

語のニュアンス」といったものではないかと推測される。

従って『片歌二夜問答』における綾足の主張の眼目は、中国語が文字の字義の組み合わせによって意思伝達を行うのに対し、日本語は言語のニュアンスを重視し、それに依って深い思いまで表現すると述べる点にあるようだ。さらに文中で「字義」と「詞のあや」が対照的に用いられていることから、ここで使われている「詞」は言語の音を指していると思ふことができるのではないか。加えて二つの語にそれぞれ「漢は」「皇朝は」と冠されている点を考え合わせると、「字」は漢字の表記、「詞」は和語の音を指していると考えられる。それらを踏まえて読み直すと「今やうの片哥といへども、唯詞のみ也。文字の理をもては、曾て作らず」と述べた箇所の大意は「自分は近世的内容の片歌といえども和語の音を基準に作っており、漢字の表記の規則を基準にして作ってはいない」という内容だと理解できる。

ここに見られる和語の音に重きを置く姿勢は、和文に対する綾足の態度やその背後にある真淵国学の影響を考える上でポイントとなる部分である。だが、そのことを考へる前に一度「正字」という存在に対する綾足のこだわりについても確認しておきたい。先の『片歌二夜問答』引用箇所について松尾勝郎氏は以下のように述べている。(18)

理論としての片歌説と連関して綾足は正字の使用を力説する。(中略)こうした正字説の背景にあるのは言葉に霊威の宿るのを信じる古学の言魂思想の投影であって、漢字を用いて認字を書くのであれば正字を使って表現すべきだとする。綾足の主張する正字とは本草学の用字を主にしていて、(中略)『古今俳諧明題集』に豊富に盛り込まれている。

これらの文章によれば、綾足は「文字の理」を以て片歌を作ること否定しながら一方で「本草学の用字」を基本とした正字へのこだわりも持っており、決して漢字表記を軽視していたわけではなかったといえる。

また『歌文要語』にも、『片歌二夜問答』の内容を受けたと思われる涼字による以下の序文がある。(19)

ことさへぐから国は鳥の跡をつらねて、こゝろをあかし、そらみつやまとのくには言霊のさきはふ国なれば、よろづのことわり詞にあり。しかはあれど、今は其鳥のあとをわいだむるよすがともなれば、是をも我大人は捨たまはず、こゝに年ご

ろかいあつめたまふものあり。なづけて歌文要語といふ。

この内容も日本語の基本が「詞」つまり和語の音にあるという説を主張しながら、綾足が「鳥の跡」つまり漢字の重要性も認識していたことについて述べたものである。これらの主張を総合すれば綾足の志向する日本語表現の姿とは基本をあくまで和語の音に置きつつ、そこに音読みの漢語が混じることも通例として容認し、且つ、表記の際には「正字」を意識し使用する漢字に気を配るといったものであったようだ。

日本語は音（音声）を重視すべきであるという考え方は賀茂真淵に先例のあるものだった。『語意考』（明和二成立、文化三刊）の冒頭には以下のような文章がある。<sup>20</sup>

この日いづる国は、いつらのこゑのまに／＼ことをなして、よろづの事をくちづからいひ伝へるくに也。その日さかる国は、万づの事にかたを書いて、しるしとする国なり。かれの日のいる国は、いつらばかりのこゑにかたを書いて、万づの事にわたりしるる国なり。

この文章で真淵は日本語、中国語、サンスクリット語の各言語で意思伝達の際に重視するものが違うという説について述べている。引用箇所を見ると「日いづる国」（日本の言葉は「いつらのこゑ」（五十音）によって語を言い表し、「よろづの事をくちづからいひ伝へる」とあり、音声及び口承が重視されることを指摘している。音声による口承が意思伝達の基本となることは日本語に限らずあらゆる言語においてそのはずであるが、真淵はそうした言語の普遍的な性質には言及せず日本語の場合に限りそれを特徴として強調する。

また『国意考』には次のような内容がある。

○かく語を主として、字を奴としたれば、心にまかせて、字をばつかひしを、後には語の主、はれ失て、字の奴の為かはれるがごとし。是又かの国の奴が、みかど、なれる、わろくせのうつりたるなれば、いまはしく、こをおもひわかで、字は尊きものとのみおもふは、言にもたらず。

傍線部で真淵は言語表現において「語」ではなく「字」に基準を置くことを非難して

いる。続く部分で「かの国」と中国について述べている点から見て、「字」の指す対象は主に漢字であるようだ。また真淵は「語」を「字」の対立項として定義しているが、これは綾足の「詞」の使い方と一致する。従って、この「語」も和語の音を指すと見なしてよいのではないだろうか。日本語における音（音声）の重要性を述べる真淵の主張は綾足の姿勢と通じるものである。しかし表記ツールとしての漢字の重要性にも言及していた綾足に対し、真淵の論調は「字」つまり漢字に対し多分に排撃的なものに見える。

『書意考』を除く五意考は宝暦十年頃には成立していたという。<sup>21</sup>そして綾足が『片歌二夜問答』の中で真淵の主張と通じる内容について述べたのは綾足が真淵に入門した宝暦十三年のことである。真淵への入門が九月、『片歌二夜問答』刊行が冬のことであり、執筆と入門の先後関係は不明である。だがこれらの事実からは、綾足が県居門入門の前後に講義か回覧用の写本によって真淵の漢字批判説の影響を受け「日本語は音（音声）をこそ基本とすべきである」という考え方を自著にとり入れた背景が浮かび上がってくるのではないだろうか。<sup>22</sup>

#### 4 『本朝水滸伝』の表現

『本朝水滸伝』が擬古的な和文で書かれた背景には前項で述べた真淵・綾足の和語の音を重視する姿勢が大きく関わっていると思われる。『本朝水滸伝』の随所に表れる音（音声）重視の傾向もこの考えを補強する一つの要素ではないだろうか。例えば本作の主要登場人物には日本語以外を話す人物が二名存在する（トビカラ、楊貴妃）。そして彼らはいずれもアイヌ語、中国語で歌う場面が描かれている。

猶かさねてもりつぐに、三益ばかりほして、「いとめでたき時也。いでうたはばや」といひて、肘をひらき、胸を打ならし、或は胸わきの右ひだりとかはる／＼うちつ、うたふ。其歌に曰、

猿目が張れるもホ 梅の木株つなせるもホ 尻は棚なす尻なも 妻としあらば 美子神子あ、うべな／＼進こそエミシノ歌ナリ  
と、後はたち踊りてうたひけるに…（第三十五条）

その天皇の御かたへにさむらひし時、臣の李白をめされけるに、いたく酔ふしてま

うでざりしに、しひてめしたりしかば、人にいだかれて、まひしづみ酔沈ながら、我うへを詩に作れり。其詩は、

雲想衣裳花想容ウンソウモリサカハカウソウヨウヨウ春風ハルウカゼ扶檻露華濃フカシキルノハナノシロ若非群玉山頭見ナラバヒキョウソウノウヘニミヤウイヘヒツウカシ会见向瑤台下逢

となんいへる。(第四十六条)

アイヌ語・中国語、いずれも近世日本において一般的に通用していた言語ではないが、ここではどちらの例にも原語を模したルビが付けられている。そして本文中に歌詞の内容解説は一切付けられていない。そのような書き方をするので必然的に読者の注目はルビ⇨歌詞の音(音声)へ集まるのではないだろうか。しかし、もちろん併記された漢字の存在も見逃すことができない以上、表記された文字に対して音(音声)だけが重く扱われていたと断定することはできない。しかし同時代において多くの読者になじみが薄かったはずのアイヌ語、中国語が共に原語に近い音で記されていることは、本作がそれだけ各言語の音(音声)を尊重する傾向を示す作品だったことと表れてはいないだろうか。

さらに表現面から和語の音重視を示す例として本作の左ルビの問題を取り上げたい。ここでは『本朝水滸伝』前編の本文左側に振られたルビのことを便宜上「左ルビ」と呼ぶこととする。右のルビが通常の振り仮名の役割を果たすのに対し、左ルビは右のルビが音読みであれば訓読みを指定する、右のルビが近世風の語であれば上代風の語に言い換えるなど場面に応じて様々な役割を果たしている。これは刊行された前編のみに付いているもので写本のみ後編には存在しない。第一条から左ルビの特徴的ないくつかの語を抽出する。

せんじょ 仙女  
ヤマビメ  
ひやくにん 百人  
モ、タリ  
きん 貴人  
タカキヒト  
くはんじん 官人  
ツカサビト  
ち 地  
ツチ

見ると分かる通り、ルビは一般的な音読みが平仮名で振られているのに対し、左ルビはなじみの薄い訓読みが片仮名で振られている。一つの漢語の左右に音読みのルビと訓読みの左ルビを両方施した態度には、漢字表記と一般的な音読みを補完する存在として訓読みを重視していた本作の特徴が表れている。『片歌二夜問答』で綾足は片歌の表現について「文字の理をもては、曾て作らず」「詞のあやをもて、深きこゝろを述る」と述べていたが、詞⇨和語の音という前項の定義を踏まえた時、左ルビとはこれらの

説を實踐する存在だったと捉えることができる。つまり特定の漢語が左ルビによって和語の音を添えられ、そこに対応する漢語と和語が互いのもつ意味やニュアンスを補完し合うという関係が生じた時、その語は初めて綾足の言うところの「詞のあや」——言語とりわけ和語の音の内包する微妙で複雑な意味まで伝達し得る表現になったといえるのではないだろうか。またアイヌ語、中国語の歌詞に原語を模したルビを振った背景にも、ルビの表す音(音声)を通じて各言語のもつ「詞のあや」まで読者に伝達しようという意識を感じさせる。

さらに、外国語を模したルビや訓読みによる左ルビの使用には、どちらも特定の語を別な語に言い換えることで目的に適った表現をしようとする翻訳への志向が見られる。先に見てきた内容面での翻案志向とこの表現面での翻訳志向に一種の連動を見出すことはそれほど無理のない発想といえるのではないだろうか。この点については引き続き次のまとめで考察したい。

### おわりに

本稿ではまず『本朝水滸伝』の内容面に表れた翻案志向を確かめた。それは着想の源を漢籍と近世文化に依拠しながら、部分的な要素のみ日本らしく、また上代らしい文物や語に置き換えることで物語全体をも日本の上代らしい虚構に仕上げていこうとする特色である。

また続いて本作の表現に表れた翻訳志向についても確認を行った。そして綾足が擬古的な和文表現にこだわった背景には真淵の漢字批判説の影響を受けた日本語は音(音声)を重視すべきという理論があったと結論付けた。このことから綾足の和文使用がいたずらな術学趣味に留まるものではなかったことも確かめられたように思う。

綾足は正字の使用にこだわりの見せる一方で「文字の理をもて」(片歌二夜問答)文章表現を行うことへの忌避感を表明していた。それは漢字という表記ツールに関心と敬意を払いながらも、そのみに依存した表現に慣れることによって、漢字の表す意味に回収されない和語の音特有のニュアンス(詞のあや)が失われていくことを危惧した結果でもあったのだろう。

本作の内容と表現についてはこれまで不一致ばかりが取沙汰されてきた。しかし、これらの特徴を見るかぎり、少なくとも翻案／翻訳の志向において本作の内容と表現は同じベクトル上にあるということは可能だろう。その連動はとりわけ漢籍を典拠とし

た日本化による翻案、漢語の左ルビによる和語への翻訳に見られるように、漢から和へのながれの上で顕著である。そして、そのながれの方向性が真淵国学を指針として定まったことは、真淵の著作と綾足の俳書、綾足の俳書と本作の内容の関連性を通して浮かび上がってきたのではないだろうか。本作の表現および内容は国学思想に裏打ちされた一貫性をもって連動していたといえる。

また反面、馬琴が「文を古雅に、事は今様に」と評したように、本作の表現と内容が読者の違和感を招くある種の齟齬を生じさせていることも事実のようだ。本作における綾足の試みをまとめるならば、表現も内容も近世から上代へ／漢から和へのながれに乗せながら、片一方の要素を切り捨てようとはせず、異なる二つの要素を補完的に併存させようというものだったといえる。だがそうした姿勢は、読者から見てもどちらの要素に主を置いて読むべきなのか分からない、非常に不確定な印象を与えるリスクをも本作に背負わせた。齟齬はその発現といえる。

しかしそれは一面で価値のある試みだったといえないだろうか。なぜなら本作における古今・和漢の併存は、異なる二つの要素の補完により、内容と表現の双方においてどちらか一方では成しえない微妙で複雑な物語世界を生み出したといえるからである。そこには確かに齟齬を越えた、綾足の理論の実践としての達成を見ることができると思われる。

## 註

- (1) 新大系解説(木越治)
- (2) (一) 内は筆者による補足
- (3) 新釈漢文大系八八『史記八』(列伝二)(水沢利忠著、明治書院、平二)
- (4) 伯夷叔斉モチーフに関しては稲田篤信氏が名分論の観点から『西山物語』における利用について分析している。(稲田篤信「名分論の光景——『西山物語』考」(『江戸文学』二二二、ペリカン社、平十三))
- (5) (参考) 新大系注釈
- (6) 本作の翻案に関しては中村幸彦氏による「綾足は、中国白話小説を、日本上代の世界に翻案すること、そのことに於て、既に好事的で、知識人に読者を限定していた」との評がある。また同氏は「：

秦の金明は、第三十四回に同じく妻子が殺される秦明から得たことであるのは、その姓名から見ても間違いがなからう」として秦金明と水滸伝の秦明の影響関係も指摘している。出典はどちらも『中村幸彦著述集』第四卷「第六章 初期読本の作家達」(中央公論社、昭六二)。

(7) 「我願ひ私にあらす。唯天下の民をおもふなり」(和尔部真太刀・第十四条)

(8) 「しろしめすことく、大伴の家は、高知穂の岳にありませし神の御代より弓矢をとりて皇辺に仕へ奉り、額に弓矢は立とも、脊には矢を負はじと、ひとつこ、ろにおもひとりて、いくばくの年月を、祖父の名絶ずつかふまつり来れるに……」(大伴書持・第二十七条)

(9) (参考) 新日本古典文学大系八二『田舎莊氏・当世下手談義・当世穴さし』(中野三敏校注、岩波書店、平二)、飯倉洋一「談義本が描く江戸」(国文学解釈と鑑賞、至文堂、平成十五年十二月) 他。

(10) 第四十三条

(11) 日本古典文学大系『風来山人集』(中村幸彦校注、岩波書店、昭三二)。：は中略(以下、他の引用も同じ)。表記を一部常用漢字に改めた。

(12) 新大系解説(木越治)

(13) 高島俊男「水滸伝と日本人」(筑摩書房、平十八)における「本朝水滸伝」評「第一条の文章を挙げてまあまことに優美なことである。こんなことで荒っぽい戦争の話なんかできるのか、とお思いでしょう? それはもう、とてもためである。……どうしてこんなことになってしまったのかという、物語の性格とそれを表現する文章の性格とがチグハグだからなのである。……中国のまさしく平民文学である『水滸伝』にヒントを得た『日本の水滸伝』を、平安時代の貴族の文章で書くという時代錯誤、——これが『本朝水滸伝』を、筋だけあって身のない、色彩も音響も量感もない作品にしてしまった致命的原因なのである。」(一) 内は筆者による補足。

(14) 『建部綾足全集』第三卷(建部綾足著作刊行会編、国書刊行会、昭六一)(以下、全集)

(15) 『古今俳諧明題集』凡例(宝曆十三刊)(全集二卷)

(16) 『詞艸小苑』跋(安永二刊)(全集七卷)

(17) これと似た内容の注記が「すずみくさ」(安永二頃成立、全集六卷)にある。「又字音の物は読みにかへて別詞のと、なふもあり。よみに唱へてはかへりて古語のさまざまあり。これらは其調にむかひてよく考とるべし」。使用される語には違いがあるものの両者共に「ルビの音訓は適宜使い分けた」という内容を述べているのだろう。

(18) 松尾勝郎「綾足の片歌説——『片歌道のはじめ』と『片歌二夜問答』をめぐって——」『文学・語学』第百十二号、全国大学国語国文学会、昭六二

(19) 全集七卷

(20) 日本思想大系三九『近世神道論 前期國学』(平重道、阿部秋生校注、岩波書店、昭四七)、国意考も同じ。

(21) (参考) 『日本古典文学大辞典』第二卷・賀茂真淵項(井上豊)(岩波書店、昭五九)

(22) 奥野美友紀氏が綾足の読本における真淵の『伊勢物語』研究の影響に関して取り上げられている。  
〔『本朝水滸伝』論——近世的歌物語の創造〕『江戸文学』第二二二号、ペリかん社、平成十三)

本文引用は全て新日本古典文学大系七九『本朝水滸伝 紀行 三野日記 折々草』(高田衛 田中善信  
木越治 校注)(岩波書店、平四)に拠った。引用に際して適宜ルビを省略した。

本稿は『『本朝水滸伝』試論——秦金明の最期に関する一考察』(『魅力ある大学院教育』イニシアティ  
ブ〈対話と深化〉の次世代女性リーダーの育成 平成十八年度活動報告書 海外研修事業編)(お  
茶の水女子大学、平十九)と一部重複する箇所があることをお断りする。

本稿の一部に木越治氏の御意見を組み込んで使用させていただきました。御教示に心より感謝申し上げます。

(二〇〇八年一月一日受理)

# Theory and Practice of a Novel in the 18th-Century Japan:

## Reconsideration of the Criticism of *Honcho Suikoden*

WATANABE Sayaka

### abstract

Takebe Ayatari's *Honcho Suikoden* is an incomplete historical novel published in 1773. As for this novel, the disagreement between the expression written by Japanese that multiuses pseudoclassicism vocabulary and content that reflects the culture at the Chinese literature has been always targeted in the criticism. However, Ayatari had announced his literary theory that influenced by Kamono Mabuchi's Japanese classical literature before this novel was written. Based on the theory, he tried to make the supplement concomitance of voice and mark, of Japanese culture and Chinese culture to create more complex, more delicate literary expression. And, this novel was one achievement as the practical theory.

Keywords : *Honcho Suikoden*, TAKEBE Ayatari, KAMONO Mabuchi, Japanese classical literature, the 18<sup>th</sup> century Japan